

「夢色コンサート」から

南部町立名川中学校 三年 堀合 真帆

「夢色コンサート？」

私がそうつぶやいたのは、母のある一言からでした。

一年半程前のある日、その日の天気はまるで、私の心を表したようにどんよりとしていました。テストの成績も上がらず、一部の活動も嫌で嫌で仕方がありませんでした。やることなすこと、全部おもしろくない、という日々を送っていました。そんな時母が、

「夢色コンサートで花束を手渡す担当してくれない？」

と声をかけてきたのです。

「それって何？」

と聞くと、

「知的障害とか自閉症とかの障害を抱えた人達が、年に一回集まって開くコンサートだよ。」

という母の言葉。私の母は知的障害者更正施設「清岳園そら」に勤務していて毎年この夢色コンサートに参加しているのだそうです。でも、「なんで私が？」と思いました。口には出しませんが、

した。

「そこで花束手渡す担当を頼まれちゃったんだけど、お母さんより真帆がやった方がいいと思うんだよね。」

と母は言うのでした。

障害者だけで歌う歌なんて、きつとあまり上手じゃないだろう、と実は心の中で思ったので断ろうとしたその時、痛いところをつかれてしまいました。

「この前のテストの点数、結構下がってたよね。家で勉強でもしとく？」

私は断りそびれて、渋々うなずきました。

それから数日たってやって来た、コンサート当日、開演までの数分間、私は眠い目をこすってため息をついていました。すると、「大変ながらも早くお待たせいたしました。これより夢色コンサートを始めます。」

というアナウンスと共に、小さな男の子がステージへ出てきました。彼は、「スイカの名産地」という歌をまさしく全身で歌っていました。口を大きく開き、手をぎゅっと握りしめ、思いきり息を吸い込んで、それこそ使える部分は全部使って一生懸命に歌っている姿に、私の内側から何かわかりませんが、熱いものがあふれてきました。歌い終わった後の彼の表情は自信に満ちあふれていました。

プログラムはどんどん進み、いろいろな障害を抱えた人達が、それぞれ一年間かけて、この日のためだけに、一生懸命に練習し

てきた歌は、私の心に強く強く響きました。そして、最後は出場者全員による「上を向いて歩こう」の合唱です。

「上を向いて歩こう、涙がこぼれないように。」

私は今の自分が情けなく、とてもちっぽけに感じました。音楽的には上手いとは言えない歌かもしれない、歌詞を知らなければ、何と歌っているのか聞き取れないかもしれない、でも、一生懸命に全身で歌う姿は私の何倍も何十倍も上を向いていました。

花東贈呈のとき、

「これからも、頑張ってください。」

と言つて手渡すと、

「あ、ありがと、う。」

と答えてくれました。私のほうこそ

「ありがと！！」

帰りの車の中で私は思いました。あの時、障害者だけで歌う歌なんて：と思った私は、何も分かっていませんでした。一生懸命になれなくて、一歩踏み出す勇気が出なくて、後ずさりしていたのは私でした。部活でも、勉強でも、だめなことを人のせいにしていました。

あれから一年半、私は、心機一転をはかり、文芸部に転部しました。部長としてみんなと共に明るい雰囲気の中で、書道や茶道、華道、弓道にも挑戦し、楽しみながら、部活動を頑張っています。また、受験生として志望校合格を目指し暑さと闘いながら勉強もしています。

こうして何事にも一生懸命に取り組もうと頑張れたのは、あの嫌々行くことになったコンサートがきっかけでした。私はきつと、ずっと忘れないでしょう。小さな男の子のあの歌を、上を向いて歩くことを、一歩踏み出す勇気と元気をくれたあのコンサートを。